

近世的都市観の生成—京都・大坂

鎌田道隆

(一) 江戸時代人の京都・大坂論

江戸時代にも、京都と大坂の都市的差違について関心をよせる人々がいた。彼らは多くの都市比較論をのこしているが、一部の好事家や文化人たちだけの関心事というよりも、その背景には多くの庶民の都市観や生き方が基本にあった。京都に生きる人々、大坂に生きる人々は、それぞれに各都市を比較し、自分の生きる都市を選んでいたといってもよいのではないだろうか。

京都の町人岩垣光定の著した『商人生業鑑』⁽¹⁾には、そのあたりの事情が語られている。光定は、「京に生まれたる徳は、都の人とて別に芸能もあるようにおもはれ、他国よりあなどらるゝことなく、常に御所がた寺社などの結構なる所を、居ながら拜み、名所旧跡山川などの面白き所多くして、都に住たのしみいふばかりなし」⁽²⁾と、田舎の

人からは京都という羨ましがられる地に生まれ育つた幸せを認識していた。とくに御所や有名な社寺などをいつても身近かに見ることができ、名所旧跡が多く、自然も美しく興趣の多いところだという点を具体的に示している。

こうした理解は、京都に住む岩垣光定のひとり合点とはいえなかつたようである。江戸から京都にはじめてやってきた滝沢馬琴は、つぎのように「皇城の豊饒なる、三条橋上より頭をめぐらして四方をのぞみ見れば、緑山高く聳えて尖がらず、加茂川長く流れて水きよらかなり。人物亦柔和にして、路ゆくもの争論せず、家にあるものを罵らず、上国の風俗事々物々、自然に備はる。予江戸に生まれて三十六年、今年はじめに京師に遊で、暫時俗腸をあらひぬ」⁽³⁾と印象を記している。いずれも、十八世紀末には形成されていた一般的な京都観を

肯定する表記とみることができ、一方的に京都のみが礼讃される都市であったというわけではなく、もうすこし詳しくみていくと多くの論者が都市比較論を展開する実態があった。

前掲の岩垣光定も同じ『商人生業鑑』のなかで、さらに詳しく、京都と大坂について論じている。

大坂は繁花の湊にて諸国より入船多く、それゆへ人の入込も甚多し。金銀代ものを大船小船に積、五百石千石の船毎日々々川口より入込。伏見其外川筋よりも入船引もきらず、何百艘といふかすを知らず。大まいの諸代ものを引請売捌き、又此明船に諸代物を積替、江戸其外諸国へ積くだし、出入りに夥しく口銭蔵敷等を取り、大商ひゆへ、人の心も大腹中にて、諸事自由なれば、栄耀奢りも京よりは格別強く、商ひの景気も賑はしく損得あらく、運と考へとがよければ、俄に大身上に成る人も多し。⁴⁾

大坂が日本の代表的な商業都市貿易都市であり、商人毎の取引量も大きく、大きな利益を得ることも可能な都市であること、また経済も活気があり、商人気質が明るいと述べている。光定の目からすれば、「大坂は海をつけて人の心陽なり、京は山をつけて人の心も陰なり。京の目から大坂の商ひはうらやましくおもふなり」⁵⁾と大坂における商業活動の活発なことは、京都人としてうらやましく見えるところがあると認めている。しかし、京都の人が大坂をまねて、大坂商人のような商売をしてはいけないのだとものべている。少し長くなるが、引用しておこう。

大坂氣に成て、大買物して持登りても、京で捌けず。京は小売場所、随分かさ高にいふても、やうやう車に積み馬に付けるより余計なし。千石船の真似はならず。夫ゆへ銀もふけもすくなし。車力駄賃にかかりて、諸式格別高くて、暮しくし。然れども、此大坂を羨む事なかれ、運よく大立身するは格別の事。惣じて京に住居するならば、商事も京の心にて随分細かに勤むべし。大坂の人とて押なべて銀持に成るでもなし、京の人がみな貧になることもなし。大坂にて不仕合にて、京へ損かくる人もあり、京に仕合する人もあり。三、四十年ならして見たらば、京も大坂も立身にさのみきつい違ひもあるまじ。一切代物の捌、商ひの働きは、大坂にこしたる事なし。万のやさしき事、諸芸の司、寺社の結構、山の美しさ、水の清き事、住居の奇麗、京に越たる所なし。京に居て、大坂の真似をすれば、惣身上仕廻なり。大坂にいて商に精出し、始末暮しかたを京の真似するならば、身上よく成事すみやかなり。⁶⁾

大坂は諸国を対象にした交易都市であるだけに、利益損益にも大きな結果がでるが、京都は内陸の小商いの都市であり、大坂のような商法は京都では通用しない。大坂では大坂の都市機能に応じた生活があり、京都には京都なりの暮らしがあるというのが、岩垣光定の論である。しかし、岩垣光定のこうした主張は、彼自身の独自の見解というよりも、大坂と京都との都市的な相違を認識している江戸時代中期の市民意識が、その基底にあるといえる。

京都町奉行所の与力であつた神澤杜口の『翁草』にも、京大坂の相違が論じられている。これも史料をあげてみよう。

総じて、京大坂の人の氣象若干違ふ處、たとへば常の商店を見るに、大坂は有たけのしろものを店一ぱいに取広げて、表を飾る故に、猶更土地豊饒に見ゆ。京は能き代物は土蔵並に櫃に蔵め置て、店には並々のものを少々出し置故に、適々他國の人の登り見るにも、大坂は繁昌し、都は衰微の様に見ゆるなり。是京大坂の氣質、陰陽相分る處、變後に顯はるゝなり。大坂の人は家を焼るゝと否、前後を不顧、いかにもして我一と家を造る。もし其力なき人は、地を沽却して所を立退く。何れに土地を荒すは、大坂の恥なりとおもふ灑然たる性質なり。都の人は地の栄枯を思ふ人は聊もなく、唯面々の身構のみをして、家を造るに容易なる人も、近隣を憚りて迂濶に家を建す。又身上不如意の人は、如何にも調議を以つて造作せんとすれども、借銀方起り出る故に造る事を不得。また地を売るにも下地の家賃の引合、其上古券の十が一にも買ふ人なければ、奈何ともする事なく、明地にして時至るを待つ様子なり。近年世上不景氣の上に、かゝる不祥に遇ぬれば、大かたは右の類の人而已なり。斯ては幾年を累ぬる共、もとの都にならん事覚束なし。⁽⁷⁾

神澤杜口は、享保九年（一七二四）の大坂大火から六年後に大坂を訪れ、その復興の早さに驚いたといふ。くらべて、いったん災害があつた場合の、京都における復興の遅さを痛感していたことから、右

のように書いた。神澤杜口の論には、市民の個人的な生活意識にもとづきながら、それをこえた都市觀が見えている。大坂の人々は「土地を荒すは、大坂の恥」とする都市觀をもっているのだという。だから、たとえ自分所有の土地であつても、自力で再建できない場合には、あつさり土地を手放す風土が大坂にはある。一方、京都では財力があつても、焼け地の隣近所が復興できかねるなか、自分だけの建家を気がねする場合もあるという。これを、神澤杜口は大坂人と京都人の氣象、氣質の差違とみている。

各地を歴遊して多くの文化人らと交友した儒者の広瀬旭莊も、神澤杜口と同じような見方をしている。広瀬旭莊はその著『九桂草堂隨筆』のなかで、「京ノ人ハ土地を尊ブ。其意ニ曰ク、江戸大阪トイヘドモ皆田舎ナリ。スムハ都ニ如クハナシト。大阪ノ人ハ富ヲ尊ブ。其意ニ曰ク、公卿官禄高シト雖モ、貧シキガ故ニ、我輩ノ商賈ニ手ヲ下グル。世ノ中ニ富ホド尊キ物ハナシト」と京都人の名譽欲に対する大坂人の金品欲をあげている。

こうした江戸時代人の京都論・大坂論は、多くの場合京都市人氣質、大坂人氣質として語られているが、いずれの場合もどちらか一方がよいとか悪いとかいうのではなく、それぞれに長所・短所を認めることで、都市の個性を評価・認識しようとしているといえよう。典型的には、文人滝沢馬琴の、京によきもの三ツ、女子、加茂川の水、寺社。あしきもの三ツ、人氣の音齋、料理、舟便。たしなきもの五ツ、魚類、物もらひ、よきせんじ茶、よきたばこ、実ある妓女⁽⁸⁾、そして

「大坂にてよきもの三ツ、良賈、海魚、石塔。あしきもの三ツ、飲水、鰻鱺、料理」とするストレートな批評がその例である。ただし、馬琴の寸評は江戸人としての江戸がらみの批評であるので、京都、大坂の都市観に根ざしたものとはいいたところがある。

(二) 手工業品生産都市・京都

江戸時代後期の人々は、大坂とくらべて、京都は文化都市的性格が強く、決して産業都市・商業都市とはみていない。これは前述の都市比較論のなかに見える基本的な論調であり、現代の私たちの都市認識とも共通しているといえそうである。しかし、こうした認識がでてくるのは、大坂という都市がいわゆる天下の台所的な都市機能をそなえてくる江戸時代中期以降のことではないかと思う。

大坂の経済的台頭以前には、京都はやはり、並ぶもののない経済都市・商業都市であった。豊臣秀吉による天正十八年からの京都改造は、石高制の基礎となる米の換金市場としての近世都市化をはかったものであり、京都の経済都市化は近世初頭にすめられていた。

寛永十五年（一六三八）の序をもつ松江重頼の俳論書『毛呷草』を見ると、諸国・諸都市の特産物数比較で、京都が圧倒的な数量を誇っていることが歴然としている。また海外貿易に従事する朱印船貿易家や、糸割符などをめぐる長崎商売人たちも、多くが京都の商人たちであった。さらに享保十三年（一七二八）の序文をもつ『町人考見録』には銀座・糸割符・呉服所・両替屋などの豪商が十七世紀には全国型

の商取引をになって活躍していたことが、実例をもって語られている。

このような十七世紀における経済都市京都をもつてするならば、江戸時代後期の人々の京都観は理解できない。それには大坂の経済的発展が京都経済の規模を大きくこえるかたちで急速に進んでいったこと、また京都の都市構造の変化が大きく関与しているのである。大坂の中央経済都市としての発展については、次節にゆずるとして、京都の変容についてここでは論じておきたい。

結論から先に言えば、十七世紀の前半には日本経済の中心にあり、全国的な商品流通の中央市場であった京都は、この間に商業資本を蓄積して巨大な豪商にと成長するものもあり、京都経済の発展をなした。しかし、江戸幕府の経済政策の変動や物資の大量輸送機能を有する大坂の台頭などにより、十七世紀後半から十八世紀にかけて、京都経済は大きな構造的変化を余儀なくされた。京都は高級な工芸や手工業を中心とする生産都市へと、その経済構造を大きく転換させていった。そして、そうした都市構造・経済構造の変化の過程に、京都に独特な歴史や文化を生かした取り組みがあった。ある意味で京都経済は京都文化として再編されていったというべきである。

貞享二年（一六八五）に出版された『京羽二重』の構成を見ると、巻一は広く知られた京都の自然や景観、巻二は著名な陵墓や古跡、著名な地蔵・薬師・観音など、巻三は京都内外の神社、巻四は寺院、巻五が官位補略・比丘尼御所・諸役人付、諸大名御屋敷等となつ

ており、最後の巻六に、京都御役の武家方役人があり、さらに「諸師諸芸」と「諸職名匠」の書きあげがある。『京羽二重』は京都の総合案内書といふべきものであるが、江戸時代の京都にのこる長い歴史のあしあとを示しながら、十七世紀末の京都の都市構造を構成する神社、寺院、公家方、武家方を紹介しているが、圧巻はやはり巻六の「諸師諸芸」と「諸職名匠」であろう。これは『京羽二重』の編者であり、また版元の一人でもある小嶋徳右衛門こと孤松子の京都観である。十七世紀末の京都を語るには、京都の文化人や諸商売人を抜きにしてはできないのだという都市観である。

まず「諸師諸芸」の項から見よう。あげられている項目は、医師、小児医師、産前産後医師、目医師、口中医師、外科、針などのように、すでに医療の分野で分科しつつある専門医毎に分けて、著名な医師の名前と住所を示すかたちをとっている。つづいて、儒、儒書講説、医書講説、韻鏡、詩、曆学、神道、有職、手跡、算者、地下歌学、連歌師、俳諧師、碁、将棋、立花、茶湯、蹴鞠、絵師、仏絵師、刀目利、古筆目利、墨跡目利、絵目利、諸道具目利の順で、同じように書きあげている。学者、教師、専門職、家元などを分類できるものは分類して、京に名高い文化人をつらねていると見てよい。以下料理人から庭作まで、総数四十七種、二百四十一人を列記している。

一方の「諸職名匠」についても概略をみておこう。『京羽二重』にあげられている「諸職名匠」には、金座、銀座、銀座、朱座の公認の役人たちから始まり、御呉服所、禁裏様御呉服所、本院様御呉服所、禁裏様

御茶師、本院様御茶師、大経師、院経師、御茶師、長崎割符年寄、分銅、秤、針口、ひわたや、御冠並烏帽子折、装束師、石の帯師、翠廉所、畳師、袷袢所とつづき、百六十六種、六百六十五人が確認でき、住所のみで名前の削られているものもあるから、およそ七百人位をあげていたものと見るべきであろう。しかし、この「諸職名匠」には、大仏師や蒔絵師、面打、筆師など「諸師諸芸」にあげられた職種とどう区別されるのか、分類の基準に疑問をもたれるものも若干あり、厳密な意味では「諸師諸芸」と「諸職名匠」の分類が本来難しいものであることもうかがえる。

このことは一応措くとして、「諸師諸芸」「諸職名匠」には、京都を考えるうえで注目するべき要素がある。まず第一にそれぞれの職種の表記に注目しよう。それは絵師や茶師、装束師、大経師、仏具師などのように職種名に師の文字が付されているものが少くないことである。また呉服所、屏風所、琴所、墨所、菓子所、香具所などのように何某所という表記も数多くみられる。何々屋という呼称と、何々師、何々所といった表記の相違に厳密な意味で、どれだけの差違を見い出せるかは、明言しがたい。しかし、師や所の用法は伝統とか權威とか、京都朝廷とかとの何らかの、繋がりを連想させるものがある。もちろん、そうしたイメージのなかには、大量生産的ではない高級な専門的技法や希小価値の随伴する高級手工業品などを暗示している。

職種の表記法とともに、人名表記にも伝統や權威をうかがわせるものがある。たとえば装束師として名前をつらねている高田出雲、牧田

和泉、鏡師の青上総、中島和泉、清水丹後、長谷川対馬、田中伊賀、針所の福井伊予、富井伊勢、井口大和など、国名いわゆる受領名を付しているものが多い。また何々師や何々所とは称していない製菓屋の遠藤出羽、粽屋の津田近江、絵具屋の稲野信濃、額彫屋の小儀能登のように、やはり受領名を付されたものもある。これらはいずれも京都朝廷の公家や地下役人らとの交際・交流と歴史的伝統を表示したものとええよう。京都の高級な技芸や手工業が、御所の伝統や権威をも商売のなかにとり込んでいくという見方も成り立つ。

これらの受領名様のものをとり込んだ人名は、多くは、家名化・商標化しているが、これらは江戸期の庶民の人名に多く用いられる何々衛門や何兵衛といった呼称と混在して『京羽二重』では列記されている。また左京、右京、主膳、左近、内匠、外記などの官職名とも、並記されており、名字や雅号のようなものとも、特に区別されてはいない。おそらく、何衛門、何兵衛といった通称・呼称に見えるものも、受領名や官職名と同様、個人的名辞というより、著名な家名として位置づけられたものであろう。さきあげた粽屋の津田近江とともに書きあげられている粽屋は単に道喜とある。これは川端道喜家のことであり、道喜の二文字で高名な粽屋であることが京都内外では広く知られていたことを示している。

『京羽二重』の特色でもある巻六の「諸師諸芸」「諸職名匠」に登場する人物は、京都を代表する文化人、職人、商人たちであり、この人たちのことを語らずに、京を語ったことにはならないという都市観

が、この時代には成立していたといえるであろう。

『京羽二重』の刊行から間もない元禄四年（一六九一）に京都を見聞したケンペルは、京都が手工業生産の随一の都市であることを観察している。

京は、いわば日本における工芸や手工業や商業の中心地である。何かを売ったり作ったりしていない家は、ほとんど見当たらない。銅を精錬する人、貨幣を鑄造する人、書籍の印刷を業とする人、金糸や銀糸で高価な花模様の反物を織る人、非常に貴重な伝統の染色術を行なう人、精巧な彫刻をする人、楽器を作る人、黄金やその他の金属を使って、非常に念入りな仕事をする人、ことに最上の鋼板を鍛え、それで大へん見事な刀やそのほかの武器を作る人々がいる。その上きれいな衣装、種々の装身具、自力で動く巧妙な人形やおもちゃの類がここで作られ、商品として陳列してある。要するに何かが考案されて、それを作ったり、あるいは精巧な外国の品物を見せてもらって、それを模造する名人が、かなりいるということである。それゆえ京都の工芸品は全国に名が通っていて、京の製品という名前さえついていけば、実際に出来栄が大へん悪くても、ほかの品物よりはずっと好かれるということである。大通りには商家以外はほとんどなく、こんなたくさんの商品や小売の品物に買手があつまってくるかと、われわれは驚くほかはない。誰もが自分が他人のために何かを買い込み、それを持って立去っていく。⁵⁾

ケンペルの観察は実にするどい。日本人が気づかなかつたところ、見抜けなかつた部分にも切り込んでいる。京都は精好な一流品が生産される都市であり、さまざまな職種にわたる第一級の技術者がいる。

表通りには商売に携らない家は一軒もなく、多くの製品が陳列され販売されている。ケンペルの指摘でもっとも重要なのは、京都産の商品には高い評価があたえられているということである。しかも京都産といえ、いささか出来ばえが悪くても喜んで消費されているという分析は、注目に値する。ケンペルの分析・観察によれば、日本人の間ではすでに元禄年間において、京都の手工業品は価値の高い銘柄品として認識されており、京都産の製品であることで土産品として価値があると意識されていたという。

さきの『京羽二重』に見た専門的な工芸家、著名な手工業技術者として、家名がすでに意味をもちはじめているという分析に呼応するものである。こうした状況は『京羽二重』の貞享二年（一六八五）よりも早く、延宝六年（一六七八）刊の『京雀跡追』⁽¹⁶⁾の序文にも、様子をつかがわせるものがある。京都市中の生業の記載に特色をもつ『京雀跡追』の序文は「都の町を尋ますれば、ほしい物有と申。先そろりく〜とまいるふ。やれ〜何をもちめつも儘く御さる」とあり⁽¹⁷⁾。豊富な物産供給の都市として、京都は位置づけられている。

江戸時代の後期には、京焼、京人形、京菓子、京紅、京白粉、京野菜のように、「京」の文字を冠した名産・名物がたくさんあらわれてくる⁽¹⁸⁾。それは単に京都の産物・商品に限らず、京学、京医、京舞、京

言葉などの学問や芸能などの文化的領域にも及ぶようになる。江戸時代中期以降の高級な手工芸・手工業品の生産地として発達してくる京都は、大量生産・大量消費的方向ではなく、小規模生産、小規模販売への道をたどる。しかも王城の地という立地、歴史、伝統をくみあげた産業構造をとることにより、文化産業都市的な方向へ進んでいった。それは「京」の文字を冠した京都ブランド産品を成立させる方向でもあった⁽¹⁹⁾。

(三) 経済・産業都市・大坂

江戸時代後半における大坂の経済的な発展が商業・経済都市大坂という都市観形成に影響をあたえたことはいうまでもない。ただし、前節でみたように江戸時代前期には、京都の方が日本随一の経済都市であり、大坂の圧倒的な経済的優位が見えるのは、十八世紀に入ってからである⁽²⁰⁾。

まず、大坂案内記として出版された『芦分船』⁽²¹⁾と『難波鑑』を見ながら、江戸時代前期の大坂を考えてみよう。『芦分船』は無軒道治と名乗る著者が、浪速の名高き神社仏閣について、知れることを記したもので、延宝三年（一六七五）に出版されたものである。全六冊からなるが、たとえばその第一冊には、難波京、堀江、今宮夷、逢坂清水、松虫塚、一心寺、茶白山、安居天神、真清水、大江岸、勝鬘院、天王寺、庚申堂、舍利寺というように大坂の名所・旧跡や著名な社寺を紹介している。その内容は、それらの歴史や由来と古歌などを

記し、参詣の風景を描いた挿図を適宜入れている。ちなみに第一冊には十二図がある。全六冊では六十八図があるが、そのほとんどは社寺参詣の風俗となつている。しかし、瓢箪町や道頓堀などの盛り場におけるにぎわいの図や、松虫塚、小町塚などでは近郊の農民の姿なども描かれたりしている。

延宝八年（一六八〇）刊の『難波鑑』⁽²¹⁾も、著者は同じく一無軒道治で、これは『芦分船』の姉妹編といったかたちをとっている。『難波鑑』も全六冊で、『芦分船』同様に各冊に十図前後の図版を入れている。『芦分船』との相違は、大坂の年中行事、とくに神事・仏事・祭礼を、正月から順に紹介していることであろう。

この『芦分船』と『難波鑑』は、京都の最初の案内記として著名な『京童』の影響を強くつけたものといえる。『京童』⁽²²⁾は明暦四年（一六五八）の出版で、六巻六冊、京都の名所・旧跡、社寺を紹介し、古歌や自作の歌をあげ挿図をかならず入れている。この『京童』の影響をうけた大坂案内記であるから、『芦分船』や『難波鑑』からこの時代の大坂の都市観を直接的に読みとろうとするには無理がある。とはいえ、『難波鑑』のわずか四年後に『京羽二重』が京都では出版されていることを考えると、経済都市としての大坂の発展がまだ大坂案内記には反映されない状況もあったと見ることもできよう。

ところが、『難波鑑』出版より一年前の延宝七年（一六七九）年に、『芦分船』や『難波鑑』などの趣味的案内記よりは実用的な大坂案内記の内容をもった『難波雀』⁽²³⁾が刊行されている。これには大阪城代

以下の武家方役人、大名屋敷、三郷惣年寄以下の町方の諸役、諸問屋、中買、諸商人、文化人などが書きあげられており、京都の総合案内記『京羽二重』に相応じるような内容である。書名からすれば、寛文五年（一六六五）の『京雀』または延宝六年の『京雀跡追』という京都の町通り毎に諸商売を紹介した実用的な京都案内記の系譜にあると考えられる。ともあれ、名所・旧跡や社寺を主とする案内記出版から、政治・経済を中心とする都市案内の志向性がでてきていることは注目できる。このことは、大坂という都市が、名所・旧跡・社寺だけではなく、政治や経済も語らなければ、その真実の姿を伝えることにはならないのだという都市観の形成が、その背後にあると見なければならぬ。

しかし、大坂の総合的な案内書としては、『摂州難波丸』⁽²⁴⁾をあげなければならぬだろう。これはのちに『難波丸綱目』として改正・増補され、近世中期以降の大坂の姿をもっともよく伝える地誌的案内記となる。難波丸という命名に、大坂らしさがよく伝わっているものがある。京都は羽二重、奈良は晒、といった織物名で都市案内記がつくられることが多いが、これは織物が縦糸と横糸から織られていることになり、縦町と横町の組みあわせからなる江戸時代の都市を紹介する手法として意識されたものである。しかし、大坂の場合には難波丸という船に見たてて町を紹介するという個性が目目される。

『摂州難波丸』の書誌学的な研究と紹介は、多治比郁夫氏・日野龍夫氏の『校本難波丸綱目』の解題に詳しく多くの教示を得た。『摂州

『難波丸』は元禄九年（一六九六）四月に大坂の書林の相版という形をとり、全五冊で刊行されたが、翌年五月に刊行された『国花万葉記』に同一の版木で収録されたりするなど、書誌学的には複雑な経緯がある。ともかく、十七世紀の末には『難波雀』などの先行案内記に重ねるようなかたちで、大坂の武家方・町方の役人名や大名屋敷、諸商人などを書きあげ、単なる名所記でもなく地理書でもない、大坂独自の案内記が『難波丸』というかたちをとってきたことは、江戸時代人の大坂観として、評価されることである。

『摂州難波丸』の出版から約五十年を経た延享五年（一七四八）三月、『改正増補難波丸綱目』⁽⁹⁸⁾が出版された。この『改正増補難波丸綱目』こそ、近世の大坂を語る最良の書であり、江戸時代の大坂人が大坂をどう語りたかったかを伝えるものである。延享版の『改正増補難波丸綱目』は、文字どおり、『摂州難波丸』を改正・増補したもので、『摂州難波丸』の第一冊が、『難波丸綱目』の第一冊と第二冊に、『摂州難波丸』の第二冊が、『難波丸綱目』の第三冊、第四冊に改正増補されている。⁽⁹⁹⁾この改正・増補された『難波丸綱目』の第三冊、第四冊がとくに圧巻である。元禄以降の大坂の都市的發展がもたらした大坂の商業・経済の方向を、そこには見てとることができる。

具体的に『改正増補難波丸綱目』の第三冊をみてみよう。この冊は、「三郷公用町人衆」から始まり、北組惣年寄・同惣代物書、南組惣年寄・同惣代物書、天満組惣年寄・同惣代物書、長崎系割符人年寄・同諸払役・同糸目利・同白糸割符付、御城内太鼓坊衆、御城内御

出入医者などの人名や住所などを書きあげている。つぎに「御城内御出入諸職工」として、御大工頭、御瓦師、御蔵方御出入以下、「御城内御出入職人」として、御鉄砲師、御弓師、御金物師以下、「御城内御出入由緒町人」などをあげている。第三冊のつぎでは「大坂惣川船支配並手代惣代」以下、伏見船、上荷船、新上荷船、茶船、新茶船、剣先船、柏原船などの船数や支配人、また大坂所々渡し船、諸国船之居場、大坂廻船問屋船印等々、港湾都市大坂の特色が実によく盛り込まれている。いずれにしても、大坂を代表する御用町人や公許の用務にたずさわる大坂町人の列記といえよう。

ところが第三冊には、これらの列記につづいて、「諸国問屋並船宿」と「諸商人之部」の膨大な書きあげがあり、「諸商人之部」は終わらずに第四冊へとつづく形をとっている。これは、大坂の「諸国問屋並船宿」の部が思いのほか大きくふくらんだ結果、第三冊に収めきれなかったことを意味していよう。

「諸国問屋並船宿」の部は関東筋問屋から始まっているが、ここには百六十七人の問屋商人の屋号と名前が所付けとともに詳記されている。ついで陸奥国問屋・船宿、松前、出羽国、駿河遠江国問屋、尾张国問屋・船宿、伊勢国志摩国問屋・船宿、加賀能登越中国問屋・船宿、越後国問屋・船宿、越前国問屋・船宿、若狭因幡国問屋・船宿、丹後国問屋・船宿、但馬国問屋・船宿、石見国問屋・船宿、出雲国問屋・船宿、伯耆隠岐国問屋・船宿、摂津国問屋・船宿、和泉国問屋・船宿、紀伊国問屋・船宿、土佐国問屋・船宿、伊予国問屋・船宿、讃

岐国問屋・船宿、阿波国問屋・船宿、淡路国問屋・船宿、播磨国問屋・船宿、備前国問屋・船宿、備中国問屋・船宿、備後国問屋・船宿、安芸国問屋・船宿、長門国問屋・船宿、豊前国問屋・船宿、豊後国問屋・船宿、肥前国問屋・船宿、筑前国問屋・船宿、筑後国問屋・船宿、日向国問屋・船宿、大隅薩摩国問屋・船宿、吉岐国問屋・船宿、対馬国問屋、周防国問屋・船宿、肥後国船宿まで、およそ十三丁分にわたり、全国の国問屋、同船宿を勤める大坂商人が紹介されている。これほど数多くの大坂商人が全国流通をになうかたちで紹介されているのは、大坂の都市的性格をよく伝えたものといえる。

第三冊から第四冊につづく「諸商人之部」は問屋・中買と割り書きされているように、国問屋・船宿以外の問屋・中買を書きあげたものであるが、米商人では、米中買合千三軒余、三郷惣銭屋組合では三郷惣銭屋合三百軒余、三郷質屋では南組北組質屋数合四百軒余、古鉄道具屋中間では中買合三千二百四拾三人など、多人数にのぼるものは代表者名とともに総人数をあげている場合が少くない。

また、たとえば材木関係なら阿波材木問屋、日向材木問屋、北国材木問屋、秋田材木問屋、尾張材木問屋、土佐材木問屋のように産地別木材の問屋の項目が立てられ、さらに酒桶類天井板杉材木問屋、船板帆柱中買、樫木之類中買、梶中買と用途別の問屋や中買も立項されている。同じように、諸国紙蔵本掛屋・問屋を特産地の大名領地毎に書きあげたあと、周防脇半紙問屋、広島脇半紙問屋、伊予杉原仙^(郡)過問屋、伊予宇和島杉原仙過問屋、伊予吉田仙過杉原問屋、備中杉原厚紙

問屋、豊後半切杉原問屋、石州脇紙問屋、大和紙問屋、地半切漣所・紙屋中買組合など、産地別、分野別問屋、中買を立項している。同様の事例は菜種油、木綿、鉄物、醤油などでも少しずつ流通の状況に応じたかたちで変化した立項がみられる。また江戸買物問屋、江戸積問屋、京積俵物買問屋、長崎本商人など、独自の問屋慣行による大坂商業の発展をうかがえる問屋・中買の立項がある。

この「諸商人之部」は前の「諸国問屋・船宿」とともに、大坂商業の質と量の高さを示しており、京都の場合とは比較にならない流通都市大坂を表出するデータである。大坂が全国型の流通都市、商業都市であることを、この『改正増補難波丸綱目』の第三冊から第四冊は示している。

「諸商人之部」が前冊から続くかたちで掲出されている第四冊には、流通都市としてだけではない近世大坂の顔も紹介されている。それは京都の『京羽二重』にならったかたちで「諸師芸術部」と「諸職名工之部」が設けられていることである。文化都市そして生産都市としての面を大坂がもっていることを主張するものであろう。

まず「諸師芸術部」からみてみよう。天文者、神字者、曆学者、有職者など人数は少ないものの立項されており、誹諧師などは系図入りで紹介されている。多いのは医師で専門に従って医師産後方、同小児方、目医師、外科、鍼医、口中医、按摩医、灸医、骨継、汐薬湯治、産婆のように分類されてもいる。絵師、絵仏師、大和絵師、擅画、女絵師と絵画の部類も細分されている。立花、蹴鞠、香事指南、茶之湯

者、茶器諸道具目利、碁、将棋、中将棋など、伝統的な職業にかかわる職種も該当人は多くはないが見られる。人数が少くないのは「丸散煉煎薬之分」で家伝名方看板無之分、同売薬之分、膏薬之部などで合計百人ほどの名前があげられている。

京都ほどではないが、大坂にも学者、文化人、知識人が健在し、また医師や薬品類も相応に整えられた庶民都市、生活都市であることを示しているといえよう。『京羽二重』の事例と同じように、『改正増補難波丸綱目』のさまざまな分類も完成度は高くない。ここでの「諸師芸術部」と次の「諸職名工之部」の職種書きあげでも、絵師が「諸師芸術部」にあるのに、仏師は「諸職名工之部」にあるなどの事例はある。こうした点はあるものの、「諸職名工之部」には、どんな大坂が紹介されているのか、次にみておきたい。

まず、道具之類があるが、鍛冶として刀鍛冶から脇指、刺刀、鋏、小刀などが書きあげられ、ついで料理包丁鍛冶、鋏毛拔鍛冶、弓師、鮫屋、古鮫膳師、鏝師、彫物師、刀脇指研屋、鏝長刀十文字研屋、鞘師、鞘塗師、柄巻師、金具師、革柄巻師、刀脇指小刀銘切師、箭根轡鷹之鈴鍛冶、武器身堅メ道具鍛冶、武器馬具諸色商人と武器類に関する微細な項目立てがみられる。これらは専門職の分化状況を示しているとも見られるが、顧客に対するサービスというか、顧客の要求に細かく対応しようとする大坂商業の特質がすでに出ているのだと見る方がよいのかもしれない。

つぎには、銅吹屋、大工、大鋸小挽、左完^(註)、屋根ふき、竈屋、瓦

師、船大工などであるが、銅吹屋以外では職人名はほとんど書きあげられていないが、人数を記すことで、産業都市大坂の奥の深さを示したかったのではないかと思う。以下、その概数を示しておこう。

大工 京中井主水殿下 大工数合四千八百人余(以下略)

大鋸小挽 京中井主水殿下 大鋸小挽惣合千六百七拾五人(以下略)

下略)

左完^(註) 左完惣数合三百五拾人余 但竈数也(以下略)

屋根ふき 屋根葺惣合四百五拾軒余(以下略)

竈屋 へつい屋惣合五拾人(以下略)

瓦師 御瓦師寺嶋藤右衛門下 瓦焼竈数三拾余(以下略)

船大工 川船大工惣合五百人余、海船大工惣合千五百人余 合

式千人余(以下略)

およそ一万人位の職人たちが存在していることが、ここには示されている。

さらに筆師、墨師、鏡師、菓子屋、琴三味線師、仏師、白粉師、釜鍋鋳物師、仏具鋳物師、錠鍛冶、土蔵ひじ坪鍛冶、立花道具師、経師表具師、針口屋、以下塗師まで二十八種の職業をあげて、多様な大坂産業界のあり様が示されている。たとえば、時計師とは別に阿蘭陀懐中時計師並印籠何ニテモ小細工といった変わり種もある。実際に書かれている職人は一名ずつ位であるが、職種の豊かさを示したかったのであろう。

「諸職名工」とまではいえないが、都市生活上で需要の多い職商人

を、早引きで検索できる「諸職商人所付いろは分」が「諸職名工之部」のつぎに掲出されている。この手法はすでに延宝六年（一六七八）十一月刊の京都の『京雀跡追』にみられるが、『改正増補難波丸綱目』では、「諸師芸術部」「諸職名工之部」につづいて、大坂の職業と町とをあげたことで、案内書としての総合性が強められているのではないかと思う。総合的な大坂案内書という意味では、同書の第五冊、第六冊に大坂の社寺や名所が紹介され、第七冊には和泉国そして堺の町までとりあげて、大坂を中心としての広域的な案内書の性格ももたせていることが見える。

（四）都市観の展回

京都は文化の町で、大坂は商業の町であるとする都市観は、江戸時代の後期にはあらわれている。京都人は伝統都市・文化都市であることを誇りとし、大坂人はいわゆる天下の台所観の成立、すなわち日本最大の商業都市であることを自認している。

しかし、こうした都市観が江戸期を通じて一貫していたのかといえれば、そうではない。近世初頭、京都は日本最大の商業経済都市として認識されていた。それは京都の都市規模や都市構造からみて、妥当な認識であったといつてよい。しかし、江戸時代中期から、大坂の経済的台頭に合わせるかのように、京都の全国型商業は行き詰まりを見せ、京都の歴史や伝統に依拠した高級手工業都市へと都市構造の転換を見せる。ケンペルの観察記録や『京羽二重』に、その様相をみるこ

とができる。京都は、その後京織、京染、京焼など、京の文字を冠した伝統的産業が形成され、産業部門だけではなく、京学や京言葉など文化的領域にも、京都ブランドの生成をすすめる、産業をも含めた京都文化がかたちづくられていく。高級手工業生産都市の性格を文化的価値の方向へと転生させていくのである。本稿では触れられなかったこうした側面は、拙稿「近世京都の観光都市化論」⁽²⁾で言及している。参考にしていただければ幸いである。

十七世紀の末から十八世紀にかけて、大坂が全国型商業経済都市へと形成されていく過程は、一面的ではあるが本稿で論じた。大坂のもつ流通都市・商業都市としての側面は、全国諸大名の蔵屋敷の林立（この点については、本稿では特に触れなかった）や国問屋・船宿などの全国経済と結びついた商人の活躍が、雄弁にもがたっている。しかし、近世の大坂は、単なる流通都市だったのではなく、その大規模都市の市民生活を充足させる生活物資を生産し、供給できる産業都市でもあった。また豊かな経済都市としての経済活動と結びついた文化都市としての側面も、都市大坂の大きな魅力となっていた。本稿では十分にこの点も論じられてはいないが、拙稿「大坂観の近世的展開」を合わせて参照いただければ、幸いである。

（1）瀧本誠一編『日本経済大典』第十三巻、史誌出版社刊、昭和三十年十月

（2）同前、六〇〇頁。

（3）『騎旅漫録』（『日本随筆大成』第一期第一巻、吉川弘文館刊、平成五

- 年新装版、二八三頁)。滝沢馬琴が京都を訪れたのは享和三年(一八〇三)である。
- (4) 岩田光定『商人生業鑑』、『日本経済大典』十三巻、六三二頁)
- (5) 同前、六三三頁。
- (6) 同前、六三三―六三三頁。
- (7) 『翁草』(『日本隨筆大成』第三期第二十二巻、吉川弘文館、平成八年新装版、三〇八頁)。
- (8) 『九桂草堂隨筆』(『続日本隨筆大成』第二巻、吉川弘文館、昭和五十四年、二六一頁)
- (9) 『羈旅漫録』(同前、二二三頁)
- (10) 『羈旅漫録』(同前、二六二頁)
- (11) 鎌田道隆「京都改造―ひとつの豊臣政権論―」(『奈良史学』第十一号、一九九三年十二月)
- (12) 脇田修・脇田晴子「特権商人の台頭」(京都市編『京都の歴史』第四巻、学芸書林刊、四一八―四二〇頁参照)。
- (13) 鎌田道隆「近世京都の観光都市化論」(『奈良史学』第十六号、一九九八年十二月、四四―四五頁参照)。
- (14) 野間光辰編『新修京都叢書』第二巻所収、昭和四十四年刊。『京羽二重』については、以後この版を用いて分析する。
- (15) 斉藤信訳『江戸参府旅行日記』(東洋文庫、平凡社刊、一九七七年、一二七―一二八頁)
- (16) 『京雀跡追』(野間光辰編『新修京都叢書』第一巻所収、昭和四十二年刊)
- (17) 『京雀跡追』(同前、二七一頁)
- (18) 森谷村久「地域産業の展開」(京都市編『京都の歴史』第六巻、二二七―二二八頁参照)
- (19) 鎌田道隆「近世京都の観光都市化論」(『奈良史学』第十六号参照)
- (20) 『芦分船』(船越政一郎編『浪速叢書』第十二号所収、名著出版、昭和五十三年十月刊)。難波名所の文字を角書として、正しくは蘆分船と書かれるが、ここでは『芦分船』の表記を用いる。
- (21) 『難波鑑』(船越政一郎編『浪速叢書』第十二号所収、同前)名所絵入の四文字を角書にした書名となっているが、ここでは『難波鑑』の表記とする。
- (22) 前掲、野間光辰編『新修京都叢書』第一巻所収。著者は中川喜雲。一人の少年を案内者として各所を巡覧するという趣向を書名にしたものである。
- (23) 『懷中難波雀』の略称で、大坂の袖珍本案内記では最古とされる。内容的には『京羽二重』などに匹敵し、年代的には『難波雀』の方が早い。編者は水雲子という。
- (24) 『摂州難波丸』については、稀覯書といわれ、その内容は『国花万葉記』で知られるのが一般的である。しかし、『摂州難波丸』と『国花万葉記』所載のものでは、書誌学的な異動もある。この両書については多治比郁夫・日野龍夫「解題」(『校本難波丸綱目』、中尾松泉堂書店刊、昭和五十二年十一月)六三七頁以降に詳しい。
- (25) 野間光辰編『校本難波丸綱目』(同前)参照。『難波丸綱目』には、延享版、寛延版、宝暦版、安永版、天明版、享和版などの諸版があるというが、本稿では紙数のこともあり、延享版のみをとりあげている。
- (26) 前掲、多治比郁夫・日野龍夫両氏の研究による。
- (27) 『奈良史学』第十六号、一九九八年十二月刊。
- (28) 『奈良史学』第六号、一九八八年十二月刊。